

---

# 水に跳ねる蝶

真雪

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

水に跳ねる蝶

### 【Nコード】

N9701Y

### 【作者名】

真雪

### 【あらすじ】

もしも貴方が望むなら、世界だって壊してあげる。蝶と女の子のお話です。リクエストを元に書きました。

夢を夢と認識するようになった頃から、繰り返し見るものがあった。

舞台はいつも水辺だった。それはテレビで見た異国の砂浜だったり、学校の中庭の池だったり、おばあちゃんの家近くの流れる川原だったりした。そして必ず、蝶が飛んでいた。紫の蝶が、春風に夏の匂いに、秋の紅に、冬の朝に紛れて、ひらひら、ひらひらと飛んでいた。

二十歳を目前にした今もその夢を見る頻度は変わらず、起きている間に蝶の模様をはつきりと思い描くことができるようになった。それでも夢はいつまでたっても夢のまま、水辺に行くことはあってもその蝶が現実に見えたことはなかった。一度、夏休みの自由研究にかこつけてたくさんさんの蝶を調べたけれどあの鮮やかな紫はどこにもなかった。

その夢があまりにも自分と密接しているせいか、蝶を一匹と数えるのがたまらなく嫌だった。高校のとき、好きだった恋人が花壇の上を舞う蝶を煙たがった瞬間にしゅるしゅると音を立てて気持ち萎んだほどだ。すぐに別れた。

蝶を、そこいらの生き物と同じに扱うことは許されない。もっと高貴で、気高くて、崇めるべき存在であるはずなのに。どうしてみんな、そんな当たり前のことが分からないのだろう。いつも不思議だった。けどその思いを口に出すことが間違っているのは分かっていた。だから私は自分だけが選ばれた存在なのだと考えた。

あの蝶はきつと神様の化身で、人間に蝶の本当の美しさを教えようとしているんだ。それに私が選ばれた。素晴らしいことだ。そう思うと誇らしくて、自然と胸を張ることができた。

凍えるような、冬の朝のことだった。その前の晩も蝶が出てくる

夢を見た。

「お母さん、ちょっと出掛けてくるね。」

「どうしたの、こんな早くに。学校？」

「ううん、ちょっと。お昼までには戻るから。」

箆笥の一番上にあつた服にコートを羽織つて、マフラーを雑に巻いて駆け出す。会える、あの蝶に。私を待っている。そう思うと自然に足が軽くなって、走っているうちに自分の身体が宙に浮かぶように思えた。

その日の夢は通学路にある大きな池だった。夢の中の私は制服を着て自転車に跨っていたから、おそらく学校へ行く途中だったのだろう。蝶がでてくることを知っていた。だから私は自転車を柵の近くに停めてじっと待っていた。

どれくらい時間が経つたんだろう。夢の中ではいつも曖昧だった時の流れは、そのときだけ現実のように鮮明だった。蝶が現れた。いつものように優雅に、穏やかに、初雪のような華をもって水面の付近を飛んでいた。

そこで私は違和感に気づく。蝶が現れるのは決まって水上だけけれど、あんなに低く飛んでいたことはない。奇妙な胸騒ぎがした。どくん、どくん、と波打つ鼓動に冷や汗が流れる。

蝶は池の中央までくると、ゆっくりと降下した。そして羽の動きを止めて、丸まった足をそつと水面に降ろした。そうして生まれた衝撃は丸い波紋を作つて、見渡せるほど広い池の隅々まで広がつた。あつ、と思わず声が出た。水につけた足の先から、蝶がみるみるその姿を凍らせたのだ。欠けることも溶けることもしない、永遠の美が約束された氷の蝶。空の果てで輝く幾万の星たちも、この美しさには敵わない。そう強く信じた瞬間、目が覚めた。

いつもと大きく違う夢は、私にひとつの確信を与えた。もうすぐあの蝶がやってくる。ずつと待ち焦がれていた私の前に現れる。それだけで、世界は何十倍も光って見えた。

息を整えることすら惜しくなるほど、胸が躍っていた。辿り着いた池は例年の如く表面が凍っていて、夢のときは違っていて氷の姿を現しているようで叫びだしたいほど興奮した。

いた。蝶が、いた。夢の姿と寸分変わらず、池の中央で私を待っていた。

言葉にならない声で喚いて氷に足を乗せた。生まれてからこんなに速く走れたことはなかった。触れる、抱き締められる、私のものになる。踏んできた氷が後ろでばきばきと割れる音がする。もう蝶はすぐ目の前にいた。

狂人のような叫びをあげながら腕を伸ばす。指先にその羽が触れた瞬間、蝶は確かに真つ黒な目で三日月を描いた。笑った。

やめて、と自分の声が戦慄くのが分かる。あなたはそんな大衆めいた表情なんか浮かべないで。特別なんだから。あなたに選ばれた私は特別なんだからあなたも特別でいて。呪詛のようにそんな言葉を延々と並べる私を嘲るように、蝶は高く高く舞い上がって青空に吸い込まれた。

湧き上がる絶望に耐え切れず、絶叫をあげると刺すような冷たい痛みが足首を掴んだ。引き込まれる奈落の底で待っている永遠の眠りで、夢を見ることは許されない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9701y/>

---

水に跳ねる蝶

2011年11月29日03時49分発行